

東日本大震災の津波被害から回復しつつある小学校への支援

—教員養成課程の大学生によるボランティア活動の可能性と課題—

From recovery to routine — How the activities of Kyoiei University Department of Education student volunteers helping with the 2011 East Japan Earthquake and Tsunami has changed over time

和井田 節子・小泉 晋一・小林 田鶴子・田中 卓也
Setsuko WAIDA・Shinichi KOIZUMI・Tazuko KOBAYASHI・Takuya TANAKA

概要

共栄大学教育学部は、東日本大震災の2011年から、被災した小学校を年2回訪問し、子どもたちと遊ぶ等のボランティア活動を行ってきた。本研究では、2013-2014年の4回のボランティア活動を、先に行った2011-2012年の活動成果の研究と比較し、分析を行った。その結果、復興とともに求められる支援内容も、瓦礫の片付けといった復旧作業から、図書の整理等の一般的なものに変化した。さらに、被災地の学校は、被災した子どもたちへのケアから、被災を乗り越えて生きる力を育もうとする方向へと移行しつつあった。医療・心理などの専門家による支援が必要な子どもたちはまだ存在するが、大学生ができることは限られている。それでも、学生の満足感は高く、子どもたちや教員から温かく迎えられ、絆も生まれた。大学に戻った学生が彼らの学びを内外に報告することが災害体験の伝承にもなっており、ボランティアは小学校教諭をめざす教育学部の学生にとり、意義深いことには変わりはなかった。

キーワード：東日本大震災、復興、学生ボランティア、教員養成、小学校

Abstract

Since 2011, Kyoiei University Department of Education has sent groups of volunteer students twice a year to elementary schools in Ishinomaki, a city hit by the East Japan Earthquake and Tsunami. This study looks at four visits from 2013 and 2014, and compares them with the results of an earlier paper looking at the 2011-12 visits. The kinds of activities required of the volunteers has changed over the years from major clean-up of debris in the early visits to more routine activities such as library duties in the later ones. Also, the emphasis has shifted from helping children recover from the shock of their experience to helping them with their educational needs. Compared to before, the need for

medical and psychological expertise is greatly reduced, but is still there, although our volunteers were unable to provide it. However, both the University student volunteers, and the pupils and staff at the elementary schools showed great satisfaction with the work they were able to do. The volunteers have shared their experiences and the lessons learnt to the rest of the student body and local community. Many of the participating students continued their relationship with the elementary schools in Ishinomaki, and the experience will probably continue to inform them as they develop as teachers.

Keywords: East Japan Earthquake, Student volunteer programs, Teacher Education, Elementary Schools, Disaster Reconstruction

目次

1. 東日本大震災の津波被害から回復しつつある小学校への支援（和井田節子）
 - 1.1. 研究の目的
 - 1.2. 研究対象期間と研究方法
 - 1.3. 共栄大学教育学部被災地学校支援ボランティアが続けてきたこと
 - 1.4. 共栄大学教育学部被災地学校支援ボランティアが変えてきたこと
 - 1.5. 共栄大学教育学部被災地学校支援ボランティアの現状と課題
2. 支援の実際（小林田鶴子）
 - 2.1. 日程と参加人数
 - 2.2. 児童への支援
 - 2.3. 施設の復旧・復興に向けての支援
3. ボランティア活動後のアンケートにみられる大学生の心の支えと教育的効果（小泉晋一）
 - 3.1. 問題
 - 3.2. 方法
 - 3.3. 結果と考察
 - 3.4. 総合的考察
4. 被災地支援活動における学生の心の成長と意欲の向上（田中卓也）
 - 4.1. 被災地支援における学内での学習—事前学習会の開催—
 - 4.2. 被災地支援直後の「振り返り（反省会）」からの学び
 - 4.3. 被災者からの学び—M氏との出会い—
 - 4.4. 参加学生の学びと成長
5. 教員養成課程の大学生によるボランティア活動の可能性と課題（和井田節子）

1. 東日本大震災の津波被害から回復しつつある小学校への支援

和井田 節 子

1.1. 研究の目的

本研究の目的は、小学校教員養成課程の学生による被災した小学校へのボランティア活動を通して、津波被害からの復興が進んだ段階の学校に対する支援の可能性と課題を探ることにある。

共栄大学教育学部学生有志は、2011年9月と2012年2月に石巻市内のS小学校に、2012年9月からはW小学校も加えた2校に年2回訪問し、子どもと遊んだり、教師の手伝いをしたりする学校支援ボランティア活動を行っている。2校に絞っているのは、決まった学校との息の長いつきあいをする方が、被災した学校のニーズに沿った支援になるのではないかと考えたからである。もともと学生の強い要望から始まったボランティア活動だったが、学校に入って子どもと接するという特殊事情から、本稿の執筆者ら教員も学生に同行し、事前学習や学校との調整を行ってきた。毎回新たに参加希望者を募る形式ではあるが、継続者が多いこともあり、次第に学生による自主運営になってきた。訪問先の学校の子どもたちや教員の役に立ちたいという思いから発しているボランティア活動ではあるが、参加した学生たちにとっても良い学びの場になっている。たった数日の活動であっても、学生の成長が感じられ、教職への意欲も高まっている。

筆者は、東日本大震災発生後1ヶ月余に石巻市を訪問して以来、石巻市の被災と復興の中で子どもを守り育てようと奮闘する学校と教師たちを見てきた¹。多くの人や団体が学校にかかわっていくことが、石巻市の学校に新しい教育の形を生み出していった面もあった。元にもどすだけが復興ではなく、震災を機会によりよい教育を作ろうとした現場の教員の努力があった。支援にかかわった人々や団体からも、支援を通して学んだことは多かった。震災から4年が経ち、復興がある程度進んできた時点で、それらを整理することは大事である。ここでは、復興が進む中で起こったボランティア活動の変化について検討を試みる。

1.1.1. 復興が進む石巻市

2011年3月11日に発生した東日本大震災で、石巻市は最も多くの人的被害を受けた市となった。死者・行方不明者数は約4,000名で、犠牲になった子どもも多い。

それから3年余、石巻市の復興は進んでいる。被災直後は破壊され瓦礫だらけになっていた石巻駅近くの商店街も活気を取り戻している。学校も、被災直後は子どもや避難してきた住民の命を守ることが第一優先であった。そのころ必要だったのは、食料と衛生的な環境の確保であった。2011年4月下旬に学校が再開されてからの1年間は、学校の日常を取り戻すことと、傷ついた子どもの心をケアすることが重要であった。しかし、学校周辺の施設設備も復旧し、日常生活が回復しつつある段階に入った3年目以降は、学校

教育の重心は、子どものケアから、被災を乗り越えてたくましく生きる力を子どもたちの中に育てる方向へと移りつつある。

本研究では、日常生活を取り戻すことに尽力していた被災後の約1－2年目と、ある程度復興が進んだ3－4年目とを比較しながら、学校への支援の在り方について整理、検討する。

1.1.2. 共栄大学教育学部有志による被災地学校支援ボランティア

筆者らは、先行研究において、2011年9月から2012年9月までのボランティア活動の観察と事前事後アンケートや感想文を分析し成果と要因を探った(和井田他, 2013)²。分析の結果、教職への意欲の高まりがみられ、その理由として、被災という特殊な状況の中で教師が重要な役割を果たしていることを実感したこと、および子どもたちから必要とされる経験をしたことが大きいことがわかった。また、短期であっても成長がみられ、その要因としては、仲間と協力し合いながらボランティア活動を行ったこと、および、毎日の出来事を共有しあう「振り返り」の時間に気持ちを表現する中で集団としての支え合いと個人として経験の構造化が行われたことが示された。

定点観測のように、石巻の学校を年に2回訪問しているので、学校の復旧の姿がよく見える。その様相は学校ごとに異なっている。被災時、校舎1階が津波に浸かったS小学校は、校舎を片付けてそのまま使用した。2013年には体育館、2014年にはプールの修復も完了した。W小学校は、校舎の1階部分が大きく壊れ、2階部分も津波でかなり損傷し、他の学校の校庭に仮設校舎を建てて学ぶことを余儀なくされていた。しかし、2014年4月から、子どもたちは元の校舎に戻って学べるようになり、以前より明るい表情を見せている。仮設校舎ではあまり運動ができなかったので、子どもたちには新しい校舎で思い切り身体を動かしてほしいとW小学校の教師たちは言う。

とはいえ、異動や卒業によって、同じ学校内で被災時の記憶を共有する教員も児童も少なくなりつつある。2014年4月時点において、震災当時小学校にいたのは、5、6年生だけとなっている。2013年から2014年にかけて教員の異動も多かった。震災の記憶は、子どもの卒業と教員の異動により、共有が難しくなってきた。

復旧が進む中で、学校が必要とすることも変わってきている。医療・心理・福祉等の支援が必要な子どもは、まだ一定数存在するが、がれきの撤去や施設の修復といった誰でもできる支援の時期はほぼ終わった。このことは支援の比重が一般から専門性の高い分野へと移りつつあることを示している。現在、被災地の学校が必要としているのは、震災後の新しい学校の在り方を支えるビジョンやシステム、そして被災の傷を癒し乗り越える力を育てるのに必要な知識やスキル、資金なのであろう。当然、教育学部学生に求められる支援も、状況の変化に応じて変化してくるのである。

1.2. 研究対象期間と研究方法

本研究では、復興が進んだ段階の学校支援の可能性と課題を探るために、2013年2月、2013年9月、2014年2月、2014年9月の4回の訪問時の、被災地学校支援ボランティア活動の記録を対象に分析を行う。

1.2.1. 研究対象期間

震災から2013年9月までの約1年半は、学校が正常な教育活動を取り戻すことに尽力した時期であった。それは、復興の第1ステージと言える。そして、2013年2月は東日本大震災から約2年経った、ある程度学校の日常が回復となっている。本研究の課題である、復興が進んだ段階の学校支援の在り方を探るため、2013年2月以降2014年9月までの1年半の第2ステージを対象に調査研究を行う。

1.2.2. 研究対象と研究方法

分析対象となる記録とは、①ボランティア活動の日程と内容の記録 ②教授会報告書、③学生対象に行っている事前事後アンケート結果 ④「振り返り」における学生の発言記録 ⑤学生の感想文集 の5種類である。

①ボランティア活動の日程と内容の記録とは、記録係の学生による記録である。活動内容が時系列で詳細に残っている。

②毎回教授会に提出している報告書は、活動の概要と同行教員による総括という形で筆者が同行教員と協議しながらボランティア活動をまとめたものである。「2. 支援の実際（小林田鶴子）」では、主に①と②の資料をもとに、活動内容の推移が検討されている。

③事前事後アンケートは、ボランティア活動による心理的成長の程度や、成長を支える要因は何かということを探る目的で、参加学生全員に毎回行ってきたものである。統計法を用いた検討結果は、「3. ボランティア活動後のアンケートにみられる大学生の心の支えと教育的効果（小泉晋一）」に述べられている。

④「振り返り」による学生の発言記録とは、ボランティア活動の終わりに毎日行っている「振り返り」時の、筆者による発言記録を対象としたものである。「振り返り」は学生全員が円形に座り、教員が司会をして、一人ずつ感想・意見・質問を述べるという形式で進められる。また、翌日の日程と活動内容についての協議も行う。2014年2月までは、宿泊所が遠かったため、電車の時間の都合で「振り返り」を訪問学校ごとに行ったり、上級生が司会して行ったりすることもあり、全員の発言の記録をとるのは困難であった。しかし、2014年9月の訪問時は石巻市内に宿泊できたため、「振り返り」に十分な時間が確保でき、学生全員の発言記録もとれた。そのため本研究では、「振り返り」時の発言は、2014年9月訪問時のものが中心になっている。

⑤学生の感想文集は、ボランティア活動後、学生が毎回作成して冊子にしたものである。感想文の他、①の詳細な記録と、②の教授会資料中の総括を簡略化したものも載せて

あり、活動の資料としての意味ももたせている。④と⑤の資料の中で使われている言葉を比較検討するという方法で「4. 被災地支援活動における学生の心の成長と意欲の向上(田中卓也)」に学生の成長が述べられている。

1.3. 共栄大学教育学部被災地学校支援ボランティアが続けてきたこと

まず、状況が変化する中でも、共栄大学のボランティアが変えず続けていることに着目し、検討する。

第1は、毎年2月と9月という訪問時期である。これは、大学の授業がなく、小学校の授業が行われている時期である。本来は、小学校が必要とする時期に呼ばれたらいつでも行く、というのがいいのだろう。また、年に2回というのは、本当にボランティアで支援しようとするとなすぎる回数である。しかし、教育学部の学生たちの授業の過密さや、学生たちが日常的に地元の学校にボランティアに行っていること等から、夏休みや春休みでなければ石巻への訪問が難しい状況がある。また、石巻までの道のりは遠く、交通費と宿泊費だけで毎回1人約2万円かかっている。それらを学生たちは捻出し、参加している。年に2回が精一杯なのである。石巻市のボランティア団体とつないで、石巻に行ける学生が自由に行くという道もさぐってみたが、双方の都合が合わず、うまく進まなかった。そういうわけで、時期と内容を学生側が決めて提案するという形になったのである。事前に教員が学校を訪問し、支援内容のニーズを聞き取るようにはしていたが、訪問時期をボランティア側が決めざるを得ないことが、支援の限界になっているとも言える。

第2は、学生たちが業間休みや昼休みに子どもたちに提供する室内遊びのプロクラムを用意していることである。用意しても使わないこともある。2014年4月に元の校舎に戻ったW小からは、「せっかく自分たちだけで使える広いグラウンドに戻ったから、強い身体に育てるためにも今回は外で遊んで欲しい」という要望があった。その時は、用意したプログラムはほとんど使わなかった。とはいえ、雨が降って室内遊びになることも、インドア派の子どもがいる可能性もある。だから、室内遊びの企画をあらかじめ立てて、小道具なども用意して、リハーサルもして行っている。

第3は、このボランティア活動が、学生によって自主的に運営されていることである。9月の回は、2年生がリーダーになって勧誘説明会から企画する。自分たちで学習会を組織し、遊びの準備をしている。2月の回は、1年生がリーダーになって運営し、2年生はそれをサポートするという流れができている。普段あまり接することのない異学年の学生同士が、心をつなげて宿泊し、ボランティアを行う3日間は、貴重な経験になっている。集団で活動し、集団を動かす経験は、教職に就いたときにも活かせる。なお、このボランティア活動は2年生までとなっている。3年生の9月には教育実習があり、4年生は教員採用試験があるためである。

第4は、毎回被災の話を書いたり被災状況の視察を行ったりしていることである。大川小学校の壊れた校舎と慰霊碑は必ず訪れている。また、校長や教頭も、毎回快く被災時の話を学生にしてくれる。危機的な状況下での決断、教員同士の協同、子どもの命を守ることの重さ、その後の教育的な関わりなどの貴重な話は、小学校教諭をめざしている学生の心に響いている。学生たちは、このような経験をした地域の子どもたちと接していることを改めて痛感する、という。

2013年9月は、さらに門脇地区に住んでいたM氏（50歳代、男性）の話を聞くことができた。日和山公園から眼下に広がる門脇地区を指さしながら、学生たちに貴重な体験を語ってくれたのだ。津波が轟音で襲ってきたときの衝撃波で気が遠くなりながらも命がけで急斜面を駆け上り間髪一髪で助かったこと、家が壊れる音、巻き上がる粉塵の色と匂い、流される人と悲鳴、雪が舞う中の避難の寒さ、流出した油で炎上した海面から燃え広がる火の手、大切な人たちを失った悲しみ、生き残った者が負う切なさ、今も耳にする仮設住宅での自殺や孤独死、……「その時」が、今も続く悲しみが五感を通して表現される。学生たちは、自然の脅威と石巻の人たちが経験しているつらい時間を共有したのだった。

1.4. 共栄大学教育学部被災地学校支援ボランティアが変えてきたこと

状況の変化の中で、被災地支援ボランティアもまた形を変えてきたことがいくつもある。

第1は、求められる支援内容である。震災後しばらくは、子どもと遊ぶことが子どもへのケアとなるという点で、学校側とボランティア側の見解は一致していた。献身的に子どもたちを支えてきた教師たちは疲れ切っている。休み時間を学生が引き受けることで少しでも休んでほしいという意味もあった。また、かわりのない大学生だからなのか、子どもの方から被災したときの話を始めることもあり、学生たちは一生懸命それを受け止めようとした。だから、事前にカウンセリング研修も行って石巻に出発した。復旧作業も、津波で壊れた机や椅子の解体作業や支援物資の整理など、たくさんあった。

しかし、うれしいことに、今は学校に日常が戻ってきている。もちろん、被災しない地域と同じと考えてかまわないわけではない。まだフォローが必要な場面はある。ただ、現在もケアが必要な児童には、これまでの一般的な対応では不足とも言えるのである。心理や福祉の専門性のある対応が必要な場合の方が多い。教育的な支援であっても、大学1、2年生でできることより専門的にトレーニングされた知識やスキルの方が必要とされる。

第2は、訪問日数の短縮である。これは学校の復旧が進み、作業的な支援そのものが減ってきたことに配慮したものである。2011年9月は2日訪問し、2012年2月には3日訪問した。これは日数を試行錯誤していた期間だった。その後は、1回の訪問で、原則

として2週にわたって合計6日間、2つの小学校を訪問するようになっていた。しかし、第6回目は、W小学校から特に頼む内容がないという理由で辞退されたこともあり、大雪で交通が不通になったこともあり、S小学校に3日間だけ訪問するということになった。そして震災後4年目に入った第7回は、1週間を前半と後半に分けた全5日間、2つの学校に行くように日数を減らした。これはバスの便が減ったことも関係している。少しでも交通費を抑えるために、夜行バスを使っていたのだが、バス会社の事情で夜行バスの便が少なくなった。夜行バスは復興を支援する人たちの足だった。復興が進んできたことも関係があるのかもしれない。

ただ、日程を同じ週にまとめたことが、前半と後半が重なる3日目の夜に学生同士による引き継ぎの時間を生み出した。これまでは、1、2週の両方に参加する教員と学生を1、2名配置することで引き継いでいたが、全員が引き継ぎに参加できるようになった。

第3は、2014年9月から石巻市内の宿泊所に宿泊できるようになったことである。それまでは、電車で1時間程度かかる場所に宿泊していた。ここまでは、安い宿泊所はすべて復興にかかわる建築関係の方々には押さえられていたため、遠方まで行かざるを得なかったのである。石巻市内に宿泊できるようになったことは、宿泊所の需要と供給とのバランスがとれるようになったということで、これも復興の進展が感じられたことである。

宿泊所には、食事も朝夕ついていたので、これまでコンビニ弁当が主だったときと比べて、栄養的にも一安心となった。宿泊所が毎日の振り返りの場所を提供してくれたのもありがたいことだった。ゆっくり深く、振り返りができることになった。石巻の人たちの温かさ、子どもの命を守る学校の重要性と覚悟、子どもたちの笑顔とそれを支える教員の姿、被災の跡を見た衝撃が語られる。学生それぞれが目標をもち、困難にあたってもしっかりとがんばった時間が語られる。この時間が、学生の情報共有の時間であり、心理的にもお互いに支え合う時間となっていた。

このボランティアには継続者が多い。2年生の多くは1年生の時にもボランティアに参加している。だから2年生は前回の訪問時との違いを語る。その中には、以前の先輩から引き継いできた記憶と比較する言葉もある。こうして、振り返りの時間の中で被災の記憶は継承されていく。それらは、教職をめざす学生達の良き学びになっていった。

1.5. 共栄大学教育学部被災地学校支援ボランティアの現状と課題

ボランティア活動は、対象者のニーズに合わせていくことが前提になる。東日本大震災直後から2年ほどは、学校外から多様で大量の支援の申し出があり、学校側には支援を必要とする状況もあった。共栄大学教育学部の学生ボランティアも、児童と遊ぶという活動を提案し、それが被災した児童を癒すという学校側の判断から活用されてきた。

そして、被災後3年目のころには、学校の日常生活はおおよそ安定した。傷ついて支

援が必要な児童には、すでに多くの支援が入っている。それでも解決していないとするならば、それは専門性が求められる分野であると言える。すなわち、医療・心理的な専門家とつなぎ、家庭的な困難を抱える児童には福祉的サポートとつなぐことが必要なのである。学校は、子どもの傷付きを理解しつつも、震災の経験を乗り越えて成長できるたくましさ育てる方向へと重心を移しはじめている。

教育学部の学生に専門性があるとするれば、それは日々学んでいる「教育」である。参加者が1、2年生なのだから、教育の専門性といっても不十分ではある。しかし、小学校教諭をめざす学生たちは、「教育」の一部を担うことが求められると、生き生きと子どもに対応していた。休み時間等で子どもと遊ぶ場合も、身体を鍛える方向性が要請されれば、子どもたちと汗を流して走り回った。授業に活用してもらったときもうれしそうであった。算数の時間に班ごとに一人ずつ入って練習問題の答え合わせをしたり、プールの授業に入って模範で泳いで見せたり、泳げない子どもに1人ずつついてアドバイスしたり、体育のキックベースボールの時間には子どもたちと一緒に作戦会議をしたり、手紙を書く国語の時間に手紙の相手になったりした。子どもたちの教育に少しでも役立てることは、学生を力づけた。

もちろん、大学生たちは自ら希望して支援するつもりで訪れている。しかし、学校側としては、そのような活動は、実習生や学校支援ボランティアの動きに近く、活用の枠組みがあいまいに感じられるという面もある。復興が進むにつれて、ボランティア活動には、子どもと遊ぶ、というだけではない、学校教育活動に沿った意味が見いだせる新しい枠組みが必要とされてきたと言えよう。

2. 支援の実際

小林 田鶴子

本活動の訪問支援に至るまでの経緯と、第1～3回（2011年9月、2012年2月および9月）の活動概要は、和井田・田中・小林・小泉（2013）に記載されている。また、本稿の1.3と1.4では、2011年から現在（2014年）までの活動の概観と特筆すべき点があげられているが、ここでは全体の参加者数や第4～7回を中心とした支援の具体的な内容を示す。これにより、本活動に対する学生の参加の意義や、学校からの支援についての要望、震災後の状況の変化や現状が読み取れると思うからである。

2.1. 日程と参加人数

まず、本活動7回における日程と実際に被災地に行った学生の人数の動向について下記の表2-1に示す。なお、日程は現地に到着した日から出発した日までで、「2回目」等は継続者の内訳である。

表 2-1 各回の参加人数

回数と日程	1期生	2期生	3期生	4期生	合計
第1回(平成23年度) 2011年9月1～3日	7人(5・2)				7人
第2回(平成23年度) 2012年2月22～24日	10人(5・5) 2回目 6人				10人
第3回(平成24年度) 2012年9月 3～5日・11～13日	5人(2・3) 2回目 1人 3回目 4人	23人 (10・13)			28人
第4回(平成24年度) 2013年2月13～15日	3人(1・2) 3回目 1人 4回目 2人	11人(3・8) 2回目 9人			14人
第5回(平成25年度) 2013年9月 4～6日・10～12日		10人(5・5) 2回目 1人 3回目 8人	24人(17・7)		34人
第6回(平成25年度) 2014年2月12～14日 (16～18日は中止)		4人(4・0) 3回目 1人 4回目 2人	10人(6・4) 2回目 6人		14人
第7回(平成26年度) 2014年9月 1～3日・3～5日			15人(9・6) 2回目 7人 3回目 5人	12人(8・4)	27人

注：人数の（ ）内の数字は男・女の順での内訳

和井田も述べていたように、表からうかがえるのは継続者の多さである。第1回に参加した7人のうち6人は第2回にも参加している。年度が変わった第3回では、第1回からの参加者4人と第2回から参加した1人という具合に、2年生は全員継続者であった。この傾向は、2期生、3期生においても続いている。また、第6回は後半日程が雪のため中止になったが、当初参加予定のメンバーを含めると、2回目参加者が13人となり、第7回では2回目が1人、3回目が13人となる。そして、第3、5、7回は同時期に2回の訪問が実施されているが、2回とも参加している学生がおり、これを継続回数に入れると、5回参加している学生も2人みられる。

こうした継続者が参加者の多くを占め、最大5回もの継続者が出ていることは、本活動が学生にとって意義深いものであることを示すものである。その一因として、和井田が述べている、9月の訪問では2年生がリーダーとなり、2月の訪問は1年生がリーダーになるという体制があげられるであろう。2回目以降は1回目とは違う立場で参加し、前回の経験を活かして新しい参加者へ継承するという役割が学生の参加意欲をより喚起したのではないかと推察される。

2.2. 児童への支援

訪問先の小学校では、授業や休み時間（業間休み、昼食後の休憩時間）の遊びの支援や、行事の支援を行った。表2-2に示したのは第4～7回におけるその具体的な内容である。この表から、授業では体育と算数の補助が多いことがわかる。特に体育は9月にプールの授業が行われているため、安全面と技能支援において学生が補助に入ることの利

表 2-2 児童への支援

回数	授業見学・学習補助の支援	遊び支援（業間休み・昼休み）		行事での支援
第4回	体育・算数（S）	室内	ダンス、新聞紙ゲーム、体操、羽根つき、カルタ遊び	スケート教室（靴を履かせる等）（W）
		屋外	サッカー等の球技、鬼ごっこ	
第5回	体育（プールも含む）・図工、算数（S） 家庭科・理科・国語（W）	室内	ジェスチャー、〇×、知恵の輪ゲーム（S） 旗上げ・サイコロゲーム、ストラック輪投げ、ボーリング（W）	カヌー体験、プロサッカー選手による特別授業、コシノジュンコ氏による特別授業（W）
		屋外	サッカー等の球技、鬼ごっこ	
第6回 （Sのみ）	図工・算数・生活	室内	?ボックス・人間まちがい探しクイズ、ダンス、スタンプラリー（第5回でやったクイズ等）	かまくら作り（校庭の雪を使って）
		屋外	雪合戦、雪のすべり台作り	
第7回	体育（プール）・体育（球技） 算数・家庭科・学活（S）	室内	猛獣狩り、スタンプラリー（S）	業間に校庭で全校マラソン（W）
		屋外	竹馬、一輪車、鬼ごっこ、フラフープ、ドッチビーなどの球技（W）	

注：表中の S、W はそれぞれの小学校のみで行われた内容

点が訪問校の要請につながったと言える。また算数は、練習問題の答え合わせや習熟度別クラスのアシスタント等、学生の役割としてふさわしい内容であったことがその理由として考えられる。

休み時間の遊び支援では、9月の訪問時（第5、7回）は、クイズやゲームなどが行われているが、2月の訪問では、お正月の行事や雪遊びなど季節を反映したものが加わっている。全体的にゲームやクイズの内容は、学生の工夫が施され、概ね好評であった。

行事での支援については、W小学校での特別授業の支援が多いが、学生はこの授業でも準備の手伝い等を行い、日常ではなかなか体験できない講師の授業にも触れている。一方、第7回のW小学校での外遊びや行事での業間マラソンなどは、仮設校舎からもとの校舎に戻ったことによる、校庭を使った授業が充実したために行われたものと考えられる。

2.3. 施設の復旧・復興に向けての支援

和井田も述べているように、訪問時には必ず石巻市内を中心とした被災地視察を行い、小学校の校長や教頭、現地の被災者から震災時の体験談を聞いている。これらは、現地の実情を生で見聞きする意味で重要であるが、学校での片付けなど、施設の復旧・復興に向けての支援活動もそれを裏づける体験として位置づけることができる。その際にもさまざまな活動をしてきたが、表 2-3 はその具体的な内容である。

この表を見てまず気づくのは、第4回のみ支援物資の整理が入っていることである。これにより、震災2年目までは震災直後の状況が続いていたことがわかる。第5回からは、除草など、震災以降の環境の変化に対応する作業が入ってきている。第6回は、訪問校はS小学校のみであったが、石巻市でもめったにないほどの大雪だったため、W小

表 2-3 施設の復旧・復興に向けての支援活動

回数	S 小学校	W 小学校
第4回	支援物資の整理、教材教具の整理	支援物資の整理、教材教具の整理
第5回	体育館倉庫の清掃と整理、藤棚の枝の収集、除草、花壇の土埋め作業、ロッカーの荷物運び、掲示物の貼り替え	校庭の除草、図書のラベル貼り、図書整理、特別授業の会場整備（カーテンの修理など）
第6回	雪かき（校舎入口、道、校門）	雪かき
第7回	除草、除砂、暗幕の取り付け、窓拭き、給食配膳の手伝い	除草、道路沿いの樹木の剪定、フェンス付近のごみ拾い、タイヤの撤去作業、少人数教室の設営、机運び、図書室の書籍整理、ファイル関連資料のまとめ、学芸会で使用する背景セットの作成

学校にも雪かきの応援に向かった。これは、まさに非常時におけるボランティア本来の活動と捉えることができる。第7回のS小学校は、ほとんどが日常作業になっていて震災からの復興を裏づける内容である。一方、W小学校は、元の校舎に戻ったという事情により、作業が多くなっているが、学芸会の背景セットの作成はやはり日常の作業である。これらは、作業の面でも支援の質が変わっていることを示すものである。

3. ボランティア活動後のアンケートにみられる大学生の心の支えと教育的効果

小 泉 晋 一

3.1. 問題

和井田・田中・小林・小泉（2013）では、被災地支援のボランティア活動に参加した大学生の心理的な成長について、アンケートの結果をもとに考察した。このアンケートでは主に、学生がボランティア活動を行ううえで①心の支えになったものは何か、②困ったときの助けになったものは何か、③活動をとおして得たことは何かの3つの点について質問をした。その結果、多くの学生が仲間たちを最も心の支えにしていたことが明らかになった。また、事前学習で学んだ知識は、困ったときの助けにはあまりならないことも示された。被災地支援のボランティア活動をとおして得たことについて、多くの学生は、子どもへの対応の仕方を学んだこと、教師になりたいという気持ちが強くなったこと、自分自身の成長を実感したことなどをあげた。

ボランティア活動後のアンケートは、ボランティア活動の教育的効果を確認し、検証するためにも不可欠である。アンケートの結果をもとに改善点を見出して、今後の学生指導に役立てることも可能になる。今年度（2014年度）のボランティア活動では、活動前は事前学習を充実させて、活動中は毎日の振り返りに十分な時間をかけるように心がけた。特に毎日の振り返りでは、一人ひとりの学生に発言時間を十分に与え、困っていることや疑問に思ったことなどを率直に話し合い、情報の交換と情報の共有化とができるように配慮した。前年度までは、宿泊地の都合によって振り返りの時間が必ずしも十分にはとれず、情報の共有化が完全ではなかったため、今年度はこれらの問題点を改めたのである。

これらの改善は、ボランティア活動をさらに充実させ、学生の学びの質を高めることにもつながるであろう。

アンケートの内容にも若干の修正を行い、新たな項目を追加した。2年前（2012年）のアンケートによって、ボランティア活動を行ううえで、上級生の存在が心の支えになっていたことが明らかになっている。そこで、上級生の存在がどれだけ心の支えになるかを問う項目を追加した。ボランティア活動を継続させるためには、何らかの心の支えが不可欠である。本調査では、何が有効なサポート資源になり得るかということについて検討する。さらに2012年の調査と同様に、ボランティア活動による教育的効果についての検討も行う。2012年の調査では、ボランティア活動をとおして自分自身が心理的に成長をしたと回答した学生が少なくなかった（和井田他，2013）。また、新たな自分を見出したという回答も認められた。ボランティア活動の教育的効果を検討するためには、その具体的な内容を検討することが重要である。本調査はそのための一資料を供するものである。

3.2. 方法

3.2.1. 調査対象

共栄大学教育学部に所属する学生で、2014年度の9月に石巻市内の公立小学校でのボランティア活動に参加した学生24人を対象とした。教育学部1年生が12人（男性8人、女性4人）で、2年生が12人（男性7人、女性5人）であった。参加回数は1回目（初参加）が15人で、2回目が6人、3回目が3人だった。参加回数が1回であった12人は全員1年生である。

3.2.2. 手続き

2014年9月に開催したボランティア活動が終了してから、半月以内にアンケートを実施した。質問内容は、2年前とほぼ同じであるが（和井田他，2013）、後述のように若干の追加と修正とを行った。すなわち、質問は大きく分けると3つある。これらの3つの質問には、複数の下位項目がある。

最初の質問は「ボランティア活動をするにあたって、①から⑥までの項目は、それぞれのくらいあなたの支えに（助けに）になりましたか」という内容である。この質問は、学生がボランティア活動をするときに、何が活動の支えになったかを検討するために設けたものである。①から⑥までの項目とは、①仲間たち、②同行教員、③現地の先生方、④児童たち、⑤地域の人たち、⑥先輩たちの6項目である。2年前のアンケートでは⑥が「宿泊先の家族」であったが、地元学生の家泊まることがなくなったことと、2年前のアンケートの結果を踏まえて、今回は「先輩たち」に変更した。これら6項目に対して、それぞれ「よく当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの5件法による評定を求めた。さらに、上記の6つ以外に、心の支えになったものがあれば記入できるように

自由記述の欄を設けた。

次に、「①と②の項目は、ボランティア活動中に困ったことがあったときに、あなたの気持ちを落ち着かせたりするのにどのくらい支えに（助けに）なりましたか」という質問を設定した。そして、①事前学習、②毎回の振り返りの2項目についてそれぞれ5件法による評定を求めた。評定のあとに、困ったときや不安になったときに、どのようにしてそれを乗り越えたかを自由記述で記入する欄も用意した。

3番目の質問では7つの項目を用意して、ボランティア活動をとおして学んだことに関する質問を行った。この7つの項目は、①「子どもへの対応が以前よりもできるようになった」、②「理想の教師像が見えてきた」、③「子どもの心に対するケアが以前よりもできるようになった」、④「教師になりたいと思う気持ちが以前よりも強くなった」、⑤「ボランティア活動をとおして、さまざまな面で自分自身が成長したと思う」、⑥「新しい自分を発見することができた」、⑦「ボランティア先の地域に愛着を感じるようになった」の7つである。最後の2つの項目は、今回、新たに追加した質問項目である。いずれの項目も、すべて5件法による評定を求めた。最後に、成長した面があるとすればどのような面で成長したと思うかについて、自由記述による回答ができるようにした。

3.3. 結果と考察

3.3.1. ボランティア活動を支える要因

最初の質問では、ボランティア活動を行うときの支えになった要因について尋ねた。表3-1に、この質問に対する学生の回答数を示した。⑥の「先輩たち」は1年生を対象にした質問なので、回答数が他の質問の半分（12人）である。

表3-1をみると、ほとんどの学生が「仲間たち」と「児童たち」に支えられたと回答していることがわかる。この結果は、2012年の結果（和井田他, 2013）とほとんど一致し

表3-1 ボランティア活動の支えについての回答 (N = 24)

	よく当てはまる	少し当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
①仲間たち	20 (83.3)	3 (12.5)	1 (4.2)	0 (0.0)	0 (0.0)
②同行した教員	11 (45.8)	13 (54.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
③現地の先生方	15 (62.5)	5 (20.8)	4 (16.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
④児童たち	19 (79.2)	3 (12.5)	2 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
⑤地域の人たち	3 (12.5)	10 (41.7)	8 (33.3)	2 (8.3)	1 (4.2)
⑥先輩たち	7 (58.3)	3 (25.0)	1 (8.3)	1 (8.3)	0 (0.0)

() 内は百分率

ている。ボランティア活動を行うにあたって、「仲間たち」からの支えと「児童たち」からの支えは、ボランティア活動を継続させるうえでも重要な要因であると推察される。自由記述では、「みんな笑顔で、大きな声を出して喜んでいる様子を見るとほんとうに幸せになりました。子どもたちが楽しんでくれたことが、本当に嬉しくて仕方がなかったです」や「遊びの時は子どもたちがたくさん集まってくれ、たくさん笑顔を見ることができてとても幸せな気持ちになりました」などの回答が得られた。このような回答は2012年のアンケートでも認められ、子どもたちに喜んでもらうことが、ボランティア活動の大きな励みになると考えられる。

その他には、「現地の先生方」に支えられていると回答した学生も少なくない。「今までのボランティア経験」という回答も散見された。⑥の「先輩たち」については、10人(80%)以上が支えになったと回答している。「地域の人たち」については、決して肯定的な回答が多いとはいえない。訪問校の教員や子どもたちを除けば、ボランティア活動中に現地の人たちと接する機会はほとんどないので、肯定的な回答が少なかったと考えられる。

3.3.2. ボランティア活動中の困難を支える要因

2つ目の質問では、ボランティア活動中に困ったことが起きたときに、「事前学習」と「毎日の振り返り」とが、どの程度の支えになったかについて尋ねた。この結果を表3-2に示した。「事前学習」に対して「よく当てはまる」か「当てはまる」と回答した学生の割合は、前回の調査では約54%であったが、今回の調査では約70%であった。したがって、「事前学習」について肯定的な回答をした学生の方が2012年のアンケートよりも増加したといえる。今回のボランティア活動を行うにあたって、前回よりも効果的な事前学習を行うことができたと考えられる。

「毎日の振り返り」については、約83%の参加者が支えになったと回答した。2012年は71.7%だったので、これも増加したといえよう。2014年のボランティア活動では、宿泊地が訪問校の近隣にあり、今までのように移動に多大な時間を費やすことがなかった。そのために、夕食後に十分な時間をかけて一日の振り返りをすることができた。振り返り時間を充実させることができたために、肯定的な回答をした学生の方が2012年のアンケートよりも多かったと考えられる。

表3-2 ボランティア活動中の困難の支えについての回答 (N = 24)

	よく当てはまる	少し当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
①事前学習	5 (20.8)	12 (50.0)	6 (25.0)	1 (4.2)	0 (0.0)
②毎日の振り返り	15 (62.5)	5 (20.8)	4 (16.7)	0 (0.0)	0 (0.0)

() 内は百分率

表 3-3 困ったときの支えに関する自由記述の回答例

班のみんなとの情報共有

前回までの経験をたよりにして、どのようにするのがベストなのかを考えていた

行ったことのある2人に相談することで乗り越えました

先生や仲間との相談

先輩に相談に乗ってもらった

仲間と感情を話し合い、共有したことが大きかったです

困ったときには先輩方や友人に聞き一緒に考えることによって解決した

先輩の言葉には何度も救われ、仲間にも愚痴をこぼすように打ち明けた

仲間と思ったこと感じたことを共有すべき

表 3-3 は、困ったときに支えになったものについて自由記述による回答を求めた結果である。表 3-1 では、「仲間たち」がボランティア活動中の心の支えになったことが示唆された。表 3-3 をみると、その具体的な内容がよくわかる。すなわち、仲間どうしで情報を共有して、感情を分かち合うことがボランティア学生にとっては大きな心の支えになると考えられる。したがって、ボランティア学生間の情報の共有と感情の交流とが円滑に進むようにするためにも、同行する教員の適切な介入が重要であるといえよう。

3.3.3. ボランティア活動をとおして学んだこと

3 番目の質問では、ボランティア活動をとおして学んだことについて自己評定を求めた。その結果を表 3-4 に示した。上段の数値は 2014 年に実施したアンケートの結果で、太字（ゴシック体）で示してある。下段の数値は 2012 年に実施した結果である。この数値は、和井田他（2013）で掲載したものと同じである。⑥の「新しい自分を発見することができた」と⑦の「ボランティア先の地域に愛着を感じるようになった」の 2 項目は、2012 年には実施しなかったため、2014 年の結果だけを掲載した。また項目⑥と⑦には、1 名分の記入漏れがあったため、他の項目よりも 1 人分だけ回答数が少ない。

表 3-4 からわかることは、まず全体的には、2012 年のアンケートと概ね同様の結果が得られたことである。2012 年と異なる点は、③の「子どもの心に対するケアが以前よりもできるようになった」という項目で、2014 年の方が 2012 年よりも肯定的な回答が多くなったことである。「よく当てはまる」「少し当てはまる」のいずれかに回答した人数は、2012 年では 50%であったが、2014 年には 75%に増加している。2014 年のボランティア学生の方が、2012 年のボランティア学生よりも、子どもの心のケアができるようになったと実感しており、自信をもつようになったと考えられる。このような変化が認められたのは、2014 年では 2012 年よりも、振り返りの時間を十分にとることができたため

表 3-4 ボランティア活動をとおして学んだことの 2012 年度と 2014 年度の回答の比較

(上段 2014年度 N=24、下段 2012年度 N=22)

	よく当て はまる	少し当て はまる	どちらとも いえない	あまり当て はまらない	まったく当て はまらない
① 子どもへの対応が以前よりもできるようになった	15(62.5)	7(29.2)	2(8.3)	0(0.0)	0(0.0)
	15(68.2)	7(31.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
② 理想の教師像がみえてきた	8(33.3)	13(54.2)	2(8.3)	1(4.2)	0(0.0)
	8(36.4)	12(54.5)	2(9.1)	0(0.0)	0(0.0)
③ 子どもへの心に対するケアが以前よりもできるようになった	6(25.0)	12(50.0)	5(20.8)	1(4.2)	0(0.0)
	3(13.6)	8(36.4)	10(45.4)	1(4.5)	0(0.0)
④ 教師になりたいと思う気持ちが以前よりも強くなった	20(83.3)	2(8.3)	2(8.3)	0(0.0)	0(0.0)
	17(77.3)	4(18.2)	1(4.5)	0(0.0)	0(0.0)
⑤ ボランティア活動をとおして、さまざまな面で自分自身が成長した	13(54.2)	10(41.7)	1(4.2)	0(0.0)	0(0.0)
	16(72.2)	2(9.1)	4(18.2)	0(0.0)	0(0.0)
⑥ 新しい自分を発見することができた	9(37.5)	8(33.3)	5(20.8)	1(4.2)	0(0.0)
⑦ ボランティア先の地域に愛着を感じるようになった	14(58.3)	8(33.3)	1(4.2)	0(0.0)	0(0.0)

() 内は百分率

であると推測される。振り返りの時間を充実させたことによって、学生間および学生・教員間での情報の共有化を十分に図ることが可能になったのである。さらに、学生間でボランティア活動にともなう感情を率直に話し合い、円滑な感情の交流が可能になった。情報の十分な共有と感情の円滑な交流とは、ボランティア活動を充実させ、学生の学びの質を高めるためにも重要な要因であるといえよう。

前述のように、本調査で新たに追加した項目が2つある。項目⑦「新しい自分を発見することができた」では、約70% (17人) が肯定的な回答をしているが、残りの約25% (6人) は肯定的にはとらえておらず³、必ずしも全員が新たな自分を発見したとはみなしていないようである。項目⑧の「ボランティア先の地域に愛着を感じるようになった」では、91.6% (22人) が肯定的な回答をした。自分自身の新たな側面や可能性を見出すことと、地域に対する愛着が高まることは、ボランティア活動を継続するうえでの動機づけにもよい影響を与えられよう。しかし、本研究では「新しい自分を発見することができた」に肯定的な回答をした学生が、いったいどのような自分を発見したのかについては明らかにしていない。もしも、この内容を明らかにすることができれば、ボランティア活動の教育的効果をより明確に捉えることができるであろう。したがって、どのような「新しい自分」を発見することができたのかについて、自由記述による回答を求める

必要もあると考えられる。

3.4. 総合的考察

今回の調査では、ボランティア学生の心の支えと教育的効果について2年前の調査と概ね一致した結果が得られた。特に、大学生がボランティア活動を行ううえで、学生間における情報の共有と感情の交流の重要性が示された。情報の十分な共有と感情の円滑な交流のためには、毎日の活動を振り返る時間を十分に用意することが不可欠である。振り返りの時間を充実させることによって、情報の共有と感情の交流とが促進されるのである。したがって同行する教員は、有意義な振り返りができるように配慮する必要がある。振り返りの時間を十分に確保することに加えて、上級生と下級生との対等な交流が促進されるように働きかけることなどの学生間の関係を調整することも大切である。学生間で支え合う環境が整うことによって、学びの質が高められると考えられる。本調査では「新しい自分」を発見したと回答する学生が多かった。その具体的な内容を分析することによって、ボランティア活動による教育的効果をさらに検討することが今後の課題である。

4. 被災地支援活動における学生の心の成長と意欲の向上

田中卓也

4.1. 被災地支援における学内での学習－事前学習会の開催－

これまでに本学では、和井田が述べているとおり、石巻における被災地支援活動として9月初旬ごろと2月中旬ごろの年2回活動している。被災地支援に出る前には「事前学習会」は欠かせない。その学習会は、参加者全員を対象にしており、欠席する者は参加させない、という規則がある。たかが被災地支援ではなく、被災地支援という役割をしっかりと担うことが参加学生らのなかでおのずと培われていると言える。

学習会はおおよそ出発の半年ほど前から開始されている。先輩の2年生が中心となり、学生の代表が同行教員（代表）と事前に打ち合わせ・相談を重ねながら進められる。学習会で必要となる資料作成についても余念がない。事前学習会の内容は①被災地における児童との接し方・マナーについて、②児童との「遊び」の内容について、③小学校での教師の役割などが主なものである。①については、(教育)心理学の研究を専門領域とされている先生方を中心に、児童への声かけや傾聴、対処方法やケアの基礎的な方法などの指導を受けることが多い。被災地特有の児童の心理状況を十分理解する必要があることから、参加学生のまなざしもつねに真剣である。彼らのやる気がひしひし伝わってくる。

②は、小林も示しているとおり、訪問先の小学校の「業間休み（20分放課）」や「昼食後の休憩時間」に、参加学生同士が事前に話し合って決めた「遊び」を行うことになっている。第1回の被災地支援活動の時から現在まで伝統として継承されている。遊びといっ

ても、どのような遊びにするのか、はじめて参加する1年生は不安や戸惑いが多い。そのため学習会では、2年生が自らの経験をもとに、どのような遊びを行うとよいのかについてそのヒントを提供している様子を目にした。児童が楽しめる遊びはもちろんのこと、児童にうまく説明できなかったなどの失敗を通して「痛い経験」もしていることから、注意点やポイント、反省点などについても1年生に対し口述していることは瞠目される。遊びの事前練習は被災地出発直前まで行われ、しっかり準備して臨む。

③は小学校での教師の役割についても、大いに学ぶことができる契機となった。小林も述べているが、たとえば授業見学や補助、訪問先の校長・教頭先生からの講話、校内清掃活動・教師の手伝い、被災地DVD視聴や被災地報道写真集などの資料の閲覧などについても行われることについてもふれていた。

毎回最後の学習会では参加学生が一つの大きな円となり被災地支援の各自の目標を全員の前で発表する。ゲーム形式で実施することもあり、リラックスした気持ちで話している。「被災地の児童に笑顔をプレゼントしたい」（2年生・男子学生）、「児童の笑顔が見られるように、一生懸命とりくむ」（2年生・女子学生）、「私達で考えた遊びをミスしないように全力で頑張る」（1年生・男子学生）、「不安はあるが皆で協力して被災地の子どもに夢と勇気を与えたい」（1年生・女子学生）など、彼らの誓いはさまざまであるが、「いっちょ、がんばってやろう！」という意欲を十分感じるのである。

4.2. 被災地支援直後の「振り返り（反省会）」からの学び

小林が述べているように、参加学生はおよそ3日間にわたり被災地の各小学校（石巻市立S小学校・W小学校）に入り、被災地支援として取り組むことになる。活動終了後は、被災地視察に出掛けているが、視察の詳細は和井田・田中・小林・小泉（2013年）でもふれられ、小林も述べているので稿を譲りたい。

和井田が述べているように、被災地視察から宿舎に戻り、夕食を済ませると今日1日の取り組みの「振り返り」を1時間程度行う。「振り返り」と呼ぶこの反省会では大学の事前学習会時と同じく、2年生の司会により参加学生が1人ずつ、その日の活動をふりかえる。本年9月の被災地支援活動では、振り返りのキーワードを提示し、「1文字の漢字」で回答させた。回答後にそれぞれ反省の言葉を話させるようにした。彼らからは、「笑」、「実」、「真」、「得」、「改」、「心」、「驚」、「実」、「自」、「繋」、「顔」、「安」、「今」などさまざまな回答が得られた。回答から判断することは難しいが、被災地のインパクトが大きいこと（真、得、改、心、驚など）児童たちの心情や様子（笑、顔、安、今など）を示すようなものが多かったように見受けられた。一生懸命内容を考えている姿勢を見るとなんとも誇らしいと思えた。

石巻の被災地支援活動は7回にのぼる。参加学生は被災地支援を経験し、どのように

感じたのであろうか。ここでは、2013年9月に1年生として初めてボランティア活動に参加し、1年後も参加した学生9名の感想文集からの言葉を対象に、その成長をさぐりたい。

表 4-1 被災地支援活動に参加した学生の感想

学生	【1年時感想】 第5回被災地支援活動（2013年9月）	【2年時感想】 第7回被災地支援活動（2014年9月）
① 男子学生・Y	今回、ボランティアに行き、こどもたちのコミュニケーションの取り方の再確認や、石巻市の復興状況や震災時の状況など様々なことを学んだ。	今回のボランティアの目標は「失われたものを取り戻そう」というものでした。人々の心が癒えるには、まだまだ時間がかかると思う。もう一度震災としっかり向き合うことが必要であると感じました。
② 男子学生・W	本心「めんどくさい」とか「もういいじゃないの」とか思っていた私がいたが、実際にボランティアされた側、した側両方に得るものがあったというのがこの体験を通して確信に変わり、またこれ以外にも活動を続けていきたいと思った。	今回はリーダーとしての仕事がひとつ増えたので、ますます意欲をもって取り組みました。然し被災地支援はまだまだ残されていることが多く感じたのも事実です。このことを認識して機会があれば、また支援活動に参加したいと思った。
③ 女子学生・H	きめていた遊びが段取りどおりに進まなかったこと。手順どおりに進まなかった理由は私たちの準備不足。また思った以上に時間が無かったということである。ボランティア体験を通じて得たたくさんの体験・経験をこれからに生かしていきたい。	今回の被災地支援では「命」がどんなにかけがえなく大切なものなのかを強く印象づけられたこと、 <u>子どもたちの笑顔の力を知ることが出来た3日間だった。</u>
④ 男子学生・Y	次回ボランティアに参加する際には今回の経験を活かし、より良いものにし、自分自身が成長し、自身もてればと思う。	私はリーダーとして何も出来ていなかったと思っています。それでもボランティアが成功したのは、この組織全体で協力しあっていたからです。反省点はたくさんあります。それをいかに次につなげていけるかが大事だと思います。その不安や不満は今後の自信につながります。今回の被災地で学んだことや衝撃を受けたことを先生になった時にどう伝えていくか、考えていきたいと思っています。
⑤ 女子学生・T	被災の現場を見ると、現実本当に起きたことなのだと体全体で感じました。埼玉にいたりやはり被災地もどこか他人事のように考えていましたが、今回の視察で決して他人事ではなく、私たちが今後の被災地を考えていなくてはいけないと感じました。	3日間を漢字でまとめると「生」です。あの日から3年半たちますが、3年間と半年、みんな生きているのです。 <u>泣き、笑い、助け合い、支え合い、生きているのだと感じる3日間でした。3回目の被災地プロジェクトは今まで一番実りのあるものとなりました。ここで感じたことは、私が教員になった時必ず子どもたちに伝えたいと思います。</u>
⑥ 女子学生・A	震災の爪痕がそのままの形で残されており、目の前に広がる光景に思わず言葉を失ってしまいました。将来、私たちが教師になったとき、自然災害からどのように児童を守ればいいのか強く考えさせられました。	被災した人達の心のケアがなによりも大切であることがわかりました。私はほかのボランティア団体にも所属しているので今後も継続的に活動を続けていきたいと考えています。復興への課題はまだたくさん残されているように感じました。
⑦ 男子学生・T	私にとってこの3日間は、忘れることは出来ない、忘れてはいけない経験になりました、今後もボランティアに参加して、少しでも復興のお手伝いが出来ればいいと思います。	まとまりの大切さや、信頼がないとできないことがたくさんあることを感じた。自分が就職するときにも当てはまることで、今回のボランティアで学んだことを、生かしていき、東日本大震災を風化させないようにしっかりと伝えていきたい。
⑧ 男子学生・I	この3日間で私は大きく成長することができたと思います。しかし、教員になるためにはさらに成長をしなければいけないと思います。そのために、私は次回以降もこのボランティアに参加していきたいです。先輩達がつくりあげた伝統を壊すことのないよう、私たち1年生もしっかり活動していかなければならないと思いました。	<u>チームワークの良さが今回のボランティアの大成功につながったと思います。次回の被災地に行く事ができたら、このボランティアを有意義な活動にするために、次回から主体となる1年生をしっかりサポートしていきたい</u> と思います。

⑨男子学生・U	こんなにつらい思いをしているのに小学生という若い力ががんばっているんだから自分ももっと頑張らなければならぬと強く思いました。次回も機会があったらぜひ参加したいです。	今回のボランティアは今までは上にいた先輩がいなくなり自分たちの学年が一番上ということになりました。このことを自覚して、準備の段階からしっかり話し合い、考え、後輩の指導もしっかりできたと感じています。
---------	--	---

下線は筆者による

被災地支援活動にでかけた大学2年生の彼らは、2011年3月11日の東日本大震災を高校2年時に、テレビ、インターネットの映像を通じて知ることになった。「被災の現場を見ると、現実には本当に起きたことなのだと体全体で感じました。埼玉にいとやはり被災地もどこか他人事のように考えていました」と語る「⑤女子学生・T」や「震災の爪痕がそのままの形で残されており、目の前に広がる光景に思わず言葉を失ってしまいました」とふりかえる「⑥女子学生・A」の言葉から、被災体験のなかった彼らが、1年時の2013年9月に被災地の光景を目の当たりにし被害の大きさを知るとともに、言葉をなくすほどの絶望感や落胆さを隠すことができない様子がうかがえる。「今回はリーダーとしての仕事がひとつ増えたので、ますます意欲をもって取り組みました。しかし被災地支援はまだまだ残されていることが多く感じたのも事実」と発言する「②男子学生・W」をはじめ、「被災した人達の心のケアがなによりも大切であることがわかりました」と述べる「⑥女子学生・A」、「チームワークの良さが今回のボランティアの大成功につながったと思います」と語る「⑧男子学生・I」、「今回のボランティアは今までは上にいた先輩がいなくなり自分たちの学年が一番上ということになりました。このことを自覚して、準備の段階からしっかり話し合い、考え、後輩の指導もしっかりできた」と話す「⑨男子学生・U」のように、2年目を迎えた彼らの被災地支援では、災害の脅威を知るとともに、チームワークの重要性、リーダーシップをとることや後輩への指導、児童のケアの重要性等を学んでいる。

「今回の被災地支援では『命』がどんなにかけがえなく大切なものなのかを強く印象づけられたこと、子どもたちの笑顔の力を知ることが出来た3日間だった」と話す「③女子学生・H」、「泣き、笑い、助け合い、支え合い、生きているのだと感じる3日間でした。3回目の被災地プロジェクトは今までで一番実りのあるものとなりました」と自ら被災地支援活動を誇りであると語る「⑤女子学生・T」等がいうように、いかに被災地支援活動や被災地視察が大きな意味があるのかを物語る。

かくして参加者と同行教員に配布された感想文集の発刊によって、個々の体験を改めてみなで共有できる機会を提供できたのである。また毎年学園祭（共栄大学樹麗祭）において、「被災地支援ボランティア活動報告」という形で、2年生を中心にポスター発表を行っている。このことはやや時間は経過しているものの、再度自分達の被災地支援活動をふりかえることができる良い機会になっている。

4.3. 被災者からの学び— M氏との出会い—

被災地視察以上に参加学生に大きな影響を及ぼしたものに、実際に被災した人々との出会いがあった。M氏との出会いである。出会いは一昨年夏に被災地視察で日和山公園に立ち寄った際に偶然にもM氏にお会いしたことに始まる。M氏は、初対面の私達に親切に対応してくださった。さらにわかりやすく当時の状況を説明していただいた。生と死の境目にいたM氏にとって東日本大震災の被災は、大変辛い経験であったであろう。それにもかかわらず、時の経過するなかで、重い口を開き、私達に話す機会を設けてくれたことは感謝に堪えない。

「振り返り」時の参加学生のコメントにもあるように、M氏の語りの反響は大きい。学生の声には「当時の被災地の状況がM氏の話ではっきり見えた。女川で波で倒れた建物を見て、意識が鮮明になった」(2年生・男子学生D)、「Mさんの話をきいて、人がたくさん死ぬことが現実だと思うと怖いしつらくなった。これからいなくなっちゃいけないし、私達も支援しつづけなくちゃいけないと思った。このままじゃいけない、明日からがんばりたい」(2年生・女子学生T)、「Mさんの話をきいて、重かったが伝えていきたいと思った。どうしてもっとはやく支援ができなかったのであろう」(2年生・女子学生A)、「Mさんの話や、津波で亡くなった人がたくさんいた階段や津波の脅威がわかった」(2年生・男子学生O)などがある。被災したM氏の語りを通して、彼らは改めて「生きること」の大切さを学ぶことになった。

被災体験は語ったのはM氏ばかりではない。S小学校の校長先生、教頭先生、W小学校の校長先生など、毎回被災地支援活動で小学校に向いた時には、多忙にもかかわらず、必ず1時間程度の時間を割いて私達に当時の状況をわかりやすく語ってくださったのは大きい。私達は貴重な出会いを通し、人の繋がり、絆の強さ、人との助け合いがどれだけ大切であるかについても同様に学んだ。生きることへの感謝、思いやることの大切さも感じることで、筆者はもちろんこと、参加学生も感慨深く感じたにちがいない。

4.4. 参加学生の学びと成長

被災地支援に参加した学生らは、多くは小学校教員を目指している。彼らは被災地支援における自身の体験を将来の自らの教育現場に生かしたいという明確な思いを持っている。彼らが理想を描く教育現場では、教える側も教えられる側もボランティア体験が貴重な学習機会になっていることは疑う余地もない。

彼らは、被災地支援が訪問先の小学校でのボランティア活動だけでないことについても学んでいる。実際に被災地視察を行い、被災した人々との交流を通じて新たに「被災地の真実を伝える」ことも重要であると認識した。被災者との出会いを通じて、参加学生は自分達にできる社会との関わり方を学ぶとともに、自分達にできることは何かを感じ、始め

ることに気づくことになったのである。またわずか3日間の被災地支援であるため、現地でもっと自分達でやれることがあったのではないかという自責の念を強く持つ学生もいたようであるが、みな学生は機会があれば、ふたたび石巻の被災地支援に行きたい、あるいは石巻だけでなく、全国に点在するほかの災害被災地支援においても、なんらかの形で被災者にかかわりたい、という言葉をおこなす学生の存在も見られるようになったことは大きな成果であった。

ボランティア活動は一過性では意味がない。しかし、ただ継続するものでもない。自らが明確な目標をもち、意欲的にボランティアに取り組むことこそ意味がある。彼らはまた被災地支援にかかわることで、ひとまわり大きな人間に成長し、新たな学びを経験していくことになるのであろう。

5. おわりに

和井田 節子

共栄大学教育学部の学生有志は、東日本大震災が発生した年から毎年2回石巻市内の学校を訪問し、被災地支援学校ボランティアを行ってきた。参加する学生は3年生になると引退しているが、同行している教員である筆者らは変わらず通い続けることになっていて、定点観測のように復旧・復興する石巻市の学校を見てきた。大きな被害を受けた学校も、4年目に入った現在では、施設設備の修復もかなり進んでおり、学校は日常を取り戻しているように見える。訪問している学校でも、その学校で被災を経験した教員も子どもも少なくなった。

状況の変化の中で、要請されるボランティアの内容も変わってきた。その内容は、第2章に詳しい。被災直後は、子どもの心のケアが第一優先であり、大学生と一緒に遊ぶことは必要なこととして歓迎された。しかし、日常が戻ってきてからは、被災の経験をバネにたくましく成長するように支える方向に教育がシフトしつつある。方針が変わると、要請される内容も変わってくる。しかし、現在求められている成長支援には、心理・教育的な専門性が要求される。教育学部学生の数日の滞在で力になるようなものではない。かといって、復旧時に必要とされた単純作業もそれほど残っていない。こうして、学生ボランティアが提供できる内容と、学校が求める支援との間にズレが生じてきたのである。

学生の方は、異学年で構成された自律的なボランティアの経験を通して、多くのことを学んでいる。第3章に詳しいが、学びの内容に関しては、被災直後も復興が進展した現在もほとんど変わりはない。学生が大切なことを学べたと感じるのは、被災地の様子を見て、被災時の話を教員や被災者の方から聞いたことであった。将来自らも小学校教諭をめざす学生として、よい学びになっていたと言う。震災の実態とその後の対応に関する知識は、先輩から後輩にも伝えられ、学生達が学園祭で発表したり、学会で報告したりする機

会も得て、災害対応の継承の役割を果たしている。

しかし、何より学生を力づけたのは、子どもたちとの交流であった。子どもたちや教師たちから必要とされた経験は、次の回への参加を促し、継続者の増加につながっている。学生たちは、学校と自分たちとの絆を感じている。

第7回学生ボランティア（2014年9月）は、学生にとって特に満足度の高い活動になっていた。その理由として以下があげられる。

- ①学生による主体的な活動になっていたこと
- ②事前学習と準備が高い出席率で行われていたこと
- ③活動中は、毎日「振り返り」を1時間程度行うことで、情報共有と支え合い、個々の出来事の構造化が行われていたこと
- ④LINE等のSNSを使って、常に同じ情報を全員が共有できるシステムを作っていたこと
- ⑤毎回事前に、大学側の教員が訪問先の管理職と会って打ち合わせを行ったこと

一方、学校側は、学校の回復に伴い、学生ボランティアの受け入れに関して、新たな局面になってきている。前述のように大学生の成長は著しいが、それは本来の目的ではない。教職をめざす大学生の成長支援を学校側が担うというのでは、ボランティアを行っているのが学校側ということにもなり、本末転倒である。

復興が進展してきた現在、学校側が学生を最も活用しやすい場面となれば、どの学校でも日常的に行っている校庭の草取りや学校行事の手伝いなどの単純作業的な仕事なのだろう。しかし、児童の役に立っている実感を得ることではげまされている教育学部学生たちにとって、教師の役に立っても、児童と接する機会がなくなれば、それだけ被災地に行っただけボランティアを行ってきたという達成感が得られにくくなるという面は否めない。

首都直下型地震をはじめ、さまざまな自然災害の予測が報じられている。学校が大規模災害によって危機に陥ることは、今後もあり得ることだ。教職を志望する学生が被災地の学校から体験的に学び、その立場から被災と復興の姿を発信することは、広い視野から見れば、学生にとってだけでなく、被災地にとっても意義深いことと言えるだろう。

筆者自身、被災を経験した学校に継続的に入る機会を得て、復興をめざすよりよい教育を模索せざるを得ない教育現場の教員の努力を頭が下がる思いで見えてきた。教師の多忙感や疲労を軽減する一助になるのなら、ぜひ大学生を今後も活用してほしいという思いが強い。それはボランティア活動に参加している大学生自身の希望でもある。とはいえ、継続をめざすためには、大学と小学校が協定を結ぶなど、支援とは異なる交流システムを構築する必要がある。だが、状況が変わり続ける学校に固定的なシステムを導入することが、かえって両者の在り方を形骸化させてしまう恐れもある。

今は、被災地ゆえの支援要請は、それほど多くない。学校支援が終了してもおかしくない状況である⁴。しかし、一般的な内容の学校支援であっても、現場の教員に、教育学部の学生を活用したいという要請があれば、学生側は全力でそれに応えようとするつながりが育っているのは確かである。ボランティア活動を行った学生が、災害とその対応の在り方を理解し、考え、他者に伝え、将来に活かしていきたいと思うことは、重要な学びである。なにより、実際に被災した学校とかかわり、被災を肌で感じ、教員の強い思いや苦勞に触れ、子どもたちの成長に接し、つながりを感じ、思いを受け継ごうと考えるようになったことが、最も大事な学びであったと考えられるのである。

- 1 石巻市の学校の被災と復興および支援に関する論考は、以下にまとめてある。
和井田節子「津波被害に遭った学校の子どものケアと成長支援」、藤田英典研究代表、『東日本大震災と教育に関する研究（全体編その1）』2014，平成24-26年度科学技術研究費補助金 基盤研究（A）課題番号24243073
- 2 和井田節子・田中卓也・小林田鶴子・小泉晋一「被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味—石巻市内の小学校における支援活動を通して—」
共栄大学研究論集，11，2013，pp. 251-272.
- 3 前述のように質問項目⑦と⑧は、1名分の未記入の回答があった。したがって、約70%（17人）の肯定的回答と約25%（6人）の非肯定的回答のほか、残り約5%（1人）が未記入の回答となる。
- 4 本論での分析には間に合わなかったが、第8回被災地学校支援ボランティアを最後の活動と位置づけ、2015年2月16日から、22名の学生の参加を得て、4日間行った。夜は、宿舎で、M氏から被災体験を、元特別支援学校長で震災当時福祉会館の館長だった阿部慶吾氏から危機対応と避難所運営を学んだ。学生たちは、これらの体験と現地視察から被災の実際を学ぶと共に、これまで以上に遊びに工夫をこらし、子どもたちと触れ合い、校内外を掃除した。学校側も授業補助として活用してくれて、学生・学校側の両者にとって満足度の高いボランティアとして終了することができた。
なお、補足ではあるが、このボランティア活動が縁で、本論筆者のうち、和井田節子と内田千春は、石巻市教育委員会の要請を受けて、それぞれの専門性を活かした値域・園・学校支援を継続している。